



服部さんが研究を始めるきっかけとなった、菊地久太郎による「北海道出稼年度記録」

消え去るものの中に発見する、大切なことを伝えたい

明治から大正にかけて全盛期を迎えた北海道のニシン漁。積丹、小樽、利尻。ニシンを追って人が、金が、物が動き、地域は大いに繁栄した。やがてニシンの回遊が途絶えて昭和30年、北海道のニシン漁は完全に幕を下ろす。このニシン漁を、漁場とそこで働いていた出稼ぎ者一主に東北出者一の関係に焦点を当てて研究しているのが服部亜由未さん。郷土資料館で鯨漁出稼者名簿を調べたり、出稼ぎ経験者から聞き取り調査をしたりと、ニシン漁の背後にある地域と人とのかかわりを探っている。

もともと、時代の中で忘れ去られてしまうような古い事象や人々の行為に関心があった。調査で出会った出稼ぎ者の記録は服部さんを魅了した。漁場の様子、賃金、漁が少なくなったときのこと、「出稼ぎ」という言葉の背後に懸命に生きる姿が感じられた。消え去ろうとするものの中に、「これは伝えたい」というものを発見する醍醐味。それが、名古屋からはるか遠いフィールドへ、服部さんを向かわせる。

まずは、ニシン漁と出稼ぎ者の関係を記録すること。その上で、北海道と出稼ぎ者たちの出身地域をつなぐような視点から何か活動ができれば、と服部さんは次のステップを見据えている。



服部 亜由未さん  
環境学研究科  
社会環境学専攻 地理学講座  
博士後期課程

その記録の人が実在していたことを確かめるため、後日、秋田へ。実際に孫の方にお会いできて、その後、交流が始まった。右が服部さん。



鯨漁業経験者への聞き取り調査  
(於:北海道小樽市祝津)。  
神社のお祭りだったので、神社で調査開始。



国立大学法人名古屋大学

〒464-8601

名古屋市千種区不老町 名古屋大学大学院環境学研究科

TEL.052-789-3455

www.env.nagoya-u.ac.jp/

